

1.研究の背景と目的

我が国は言わずと知れた地震大国である。現在我が国において今後 30 年以内に南海トラフ地震が起きる可能性は約 70 パーセントに達するとされており、その被害予測は甚大なものが想定されている、このような状況において、重要なことの一つは、国民一人一人が災害に対する意識を高め、確実な備えをすることである。これに関連し、災害映画作品がその普及啓発に効果的であると考えた。

本研究では、2016 年に公開された二つの災害映画「シン・ゴジラ」「太陽の蓋」の比較分析を行った上で、災害映画が防災・減災普及活動にどのような影響を及ぼすのか考察を行う。

2.本研究の位置づけ

2.1 ひっ迫する将来の地震災害リスク

駿河湾から遠州灘、熊野灘、紀伊半島の南側の海域及び土佐湾を経て日向灘沖までのフィリピン海プレート及びユーラシアプレートが接する海底の溝状の地形を形成する区域を南海トラフと呼び、この南海トラフ沿いのプレート境界を震源とする大規模な地震が南海トラフ地震である。南海トラフ地震は現在我が国が想定する最大級の災害の一つである。約 32 万人の人的被害を及ぼし、さらに経済的被害規模は約 220 兆円を超える想定がされており、この被害規模に対して行政が主導して行う災害支援（共助）の備えでは個別的に対応することに限界が生じるため、国民一人一人が自ら災害への備えに取り組む防災意識が重要となる。

2.2 国民の防災意識について

上記に述べた危機に対する国民の意識の現状に関する指標として内閣府が行った調査⁽¹⁾では、「日々の生活で備えが必要だと思いますか、また具体的に何かしていますか？」という質問に対する結果について図 1 に示す通りとなり、災害危機に対する具体的な措置を個々人で取る人は半分以下であるという現状が示されている。

この問題点の原因について、災害に対する具体的な情報が国民に普及しておらず、その危険性に対する認識に乏しく、災害を自分事として認識しないことが考えられ、そのような状況の背景にはプル型の情報社会の形成があると考えた次節でその根拠を述べる。

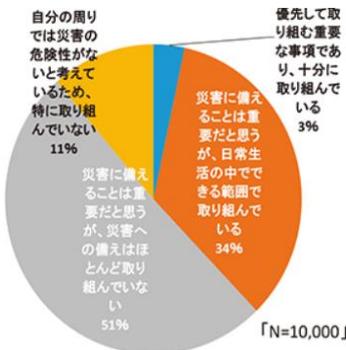


図 1 内閣府実施アンケート結果

2.3 プル型情報社会の形成と問題

本研究では、現在我が国における情報通信機器の普及とその利用方法に着目し、スマートホンとそれに伴ったソーシャルメディアの普及率の増加が近年顕著であること、

またソーシャルメディアが、インターネット検索という情報取得者の主体的な行動を要することを前提としている特徴から、現在のわが国において、上記の特徴を有する「プル型」の情報社会の形成が進行していると考えられる。

そのようなプル型の情報社会において要点を簡潔に伝えられる映画のようなメディアが重要な意味を持つと考えプル型の情報社会において、多くの人々に関心を持ってもらい、かつ重要であると考えた。

2.4 我が国における自然災害と災害映画の関係

近年における我が国の映画産業規模は、興行収入額及び観客動員数を年々増加しており、また、公開される作品数も伴って増加している、更に、平成 28 年のわが国における災害を扱った映画作品（君の名は、シン・ゴジラ、太陽の蓋）の全体に占める興行収入額は 20 パーセントを超えており、多くの人々の関心を引いていることが述べられる。

また、図 2 は災害を扱った国内の映画の公開数と大規模災害発生との関係を示したものであるが我が国において「伊勢湾台風」、「阪神淡路大震災」や「東日本大震災」といった大きな被害をもたらした災害を取り扱った映画作品は数多く制作されており、災害映画は実際の災害史と密接な関係があり、災害に対する情報や教訓を作品として残し、将来につなげていくという社会的な動きを確認することができる。

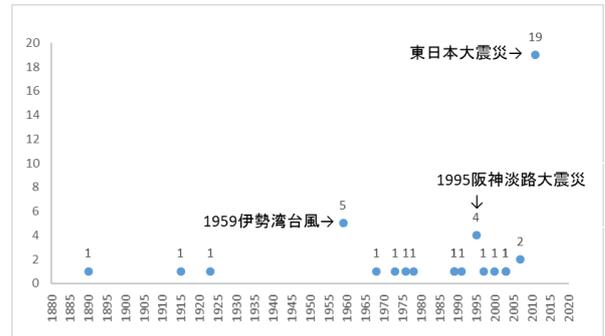


図 2 災害発生年と当該災害を扱う映画公開状況

3. 二つの災害映画の比較分析

3.1 映画「シン・ゴジラ」「太陽の蓋」概要

両作品は東日本大震災から 5 周年を迎えた 2016 年の 8 月に公開されている。

映画「シン・ゴジラ」では、「ゴジラ」と呼称される巨大不明生物の首都への襲来に対する我が国の災害対応について官邸を中心に描かれている。

本研究では、巨大不明生物の襲来を東日本大震災に伴って発生した福島第一原子力発電所事故の比喩であると仮定をした。一方で当該災害に対する我が国の対応について、福島第一原子力発電所における事故対応を比喩的ではなく、実際に発生した事故の様子が忠実に従って描かれている映画「太陽の蓋」における我が国の対応と比較することで、作品における特性の違いを考察する。これにより災害映画の防災・減災普及啓発に対する効果の検討を行うことができる。と考えた。

3.2 分析方法

映画「シン・ゴジラ」が巨大不明生物の襲来という架空

の災害を題材について取り扱っていることから、作品内で描かれている事象とその対応について、現在の制度や法律、東日本大震災及び熊本地震での事例と比較することで、その対応がどの程度現実に即しているかの検証を行う。また、映画「シン・ゴジラ」公式記録集「the art of Godzilla」に掲載されている撮影に用いられた時間香盤表（撮影シーンの場所や設定概要について映画作品内における時系列に沿って整理されたもの。）から、作品内における時系列と概要を定義し行うものとする。

次に比較分析としてはそれぞれの脚本（「太陽の蓋」の脚本については後述）や、制作が公式に公開している情報から、両映画の類似している点及び相違点について抜粋して、その表現方法や制作の意図を比較、その効果について分析を行うものとする。

なお、比較で用いる脚本について、「太陽の蓋についてはそのような資料が確認できなかった。そのため、DVD版に付属する身体障害者向け補助機能から、登場人物のセリフや、映像シーンの状況説明をまとめたもの作成し、脚本として使用した。作成した脚本の一部を以下図3に示す。

東京
 雨の中を歩く群衆のたくさんの傘。
 地震によって更地になってしまった福島沿岸部。
 はだかになった枯れ木が青空にたたずむ。
 人々が行きかう雨の東京。
 福島の誰もいない空き地にたたずむ墓石。
 東京 雨の中の群衆 墓地の先の海岸では、放射能の除染作業が進む 波しぶきの前で作業者が黒い除染用の土嚢袋に包まれた汚染物質をクレーンで引き上げていく。
 積み上げられた黒い土嚢。
 雨の中に揺らぐ群衆の傘 この先帰還困難区域の看板 雨の中の群衆 沿岸部の静寂 夕日に照らされた川に水鳥の群れ 東京のビル群にも日が沈んでいく 立ち並ぶ巨大なビルや高速道路に無数の明かりが浮かぶ。

字幕 2012年 東京
 パーのカウンターでグラスを傾ける男が二人。
 (鍋島)お前ならどう書く？山中 メルトダウンは起きてた 格納容器は限界を超えてた 東京、東日本...日本全体が危なかったんだ、それを知っていて、隠したやつがいるんだぞ。
 (山中)お前んとじゃ、政治部の人間が付く原稿の記事、乗せてくんのか？
 答えずグラスをあおる、細面の神経質そうな男。
 (山中)うちの新聞にはそんなページないね なあ 鍋島 今ときはやんないぜ、記者魂なんて、鍋島はゆっくりと山中に目をやる。
 (山中)お前が尻尾ぶくなって、新情報なんてこれからいくらでも出てくる。それを待ったほうが無難だ。

図3 作成脚本一例

3.3 結果と考察

「シン・ゴジラ」の災害対応シーンの現実性の確認について、「1.災害発生からの初動対応」「2.緊急災害対策本部の設置について」「3.災害緊急事態の布告」「4.作品内における自衛隊の活動」「5.「巨大不明生物特設災害対策本部（巨災対）」の設置」の5点に着目して確認を行った。

現実の対応を反映していると判断できる結果の一例として、作品内において災害が発生した時刻以降の官邸の対応の流れに関して、東日本大震災発生時における状況の比較を図4のようにまとめる。

一方、現実の対応とは判断できないような表現についても複数確認することができた、そのなかでも、法律の規定に関する事象については、適用の判断に曖昧さが残っていることが確認した、一例として緊急災害事態の布告に関して図5にまとめる。

次に、2つの映画の比較分析を行った結果について、災害の対応として重要である緊急時の「組織体制」及び「情報の伝達と利用」に作品内で使用されているセリフに着目し、防災上重要なキーワードを過去の災害における報告書から抽出し、それらの使用が確認できるシーンを防災啓発に効果的であると考えられるシーンとして抽出することができた。

災害映画作品に共通している点については、災害映画を製作する上で必要不可欠な要素であると捉え、今回の研究で得られた結果として、事実や事例に対して客観的に描写を行うことに加えて、その描写を作品内に反映させるかについては製作者の意図が影響していることが述べられる。類似しているシーンの異なる表現には、制作者の意図が強く反映され、それは作品の立ち位置や作品への協賛にも影響を受けうることが考察できる。事実に対する多角的な視点が与えられ、その受け取り方についても個人の主観に非常に強く影響されるため、制作の意図が実際に映画の視聴者へと伝達されるかについては個別に実証を行う必要があり、今後の課題となってくるであろう。



図4 分析結果例(1)

12:05 S55 官邸・大会議室

・緊急対策本部設置に関する会議が行われる

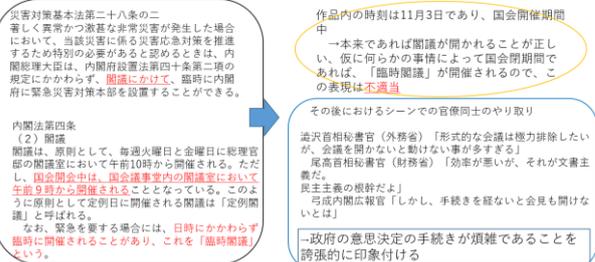


図5 分析結果例(2)

4. まとめ

本研究では2016年に公開された二つの映画作品「シン・ゴジラ」及び「太陽の蓋」を取り上げて、作品を構成する要素や特徴、表現方法について比較分析を行うことにより、それらの防災・減災の普及啓発に対する効果に関して検討を行った。

映画作品を分析することを通して、その表現方法と作品制作の意図や作品を構成する要素に関する密接な関係があり、それらが作品視聴者へ与える効果を考察することができた。今後は実際に視聴者がどのような効果を得ているかをフィードバックする必要があり、それらから得られたものとまとめることで、新しい防災・減災の普及啓発の媒体の開発への可能性を示唆することができると考えられる。

参考文献

(1) 平成28年5月31日「日常生活における防災に関する意識や活動についての調査」(内閣府)